



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY



CTL

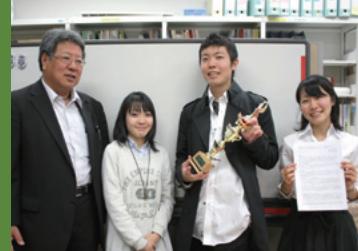
Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter



関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2011

vol. 07



全学の「教育的資源」の十全な活用を！



教育開発支援センター長
田中 俊也

Developmentということばはわれわれ心理学の研究者仲間では、一切の前提なく「発達」と訳される。もともと個々にそなわっているさまざまな資質や力量は、巾着のようなもの、巻物のようなものに包み込まれ、閉じ込められている（velopされている）が、その束縛を解かれ外され（de-）、そこからどんどんそれらが広がっていくさまを発達という言葉で表す。いわば、個体の内部に存在する発展可能性を示したものともいえよう。これが自力では十分に発展しない場合、まわりの力で外へ（e-）取り出す（duce）という行為が行われる。Educationとしての教育の登場である。

異なる領域ではdevelopmentを「開発」と訳すことがある。開発は、人に対して使われるときは上記のeducationに近い意味を持つこともあるが、自然の事物に対する開発は、その「事物」は人間にとて望ましくない形態をもっており、それを望ましい形に変えることを意味する。この、外部からの力で対象を変化させる、という意味が開発ということばにはつきまとう。

また、「能力」ということばは、さまざまな種類の資質や力量を示すことがある。たとえばabilityとしての能力はそれができるか

どうかを中心としたものであり、competenceは、表には現れないが潜在的に持っている「力」を示すものとして用いられる。こうした中で、facultyは、特殊な事務能力や教員集団の職能を示している。

ここで最も曖昧なのが、教員集団の職能としてのfacultyが何を示すかである。大学教員は主に研究活動を行い優れた研究業績を持って大学に任用される。しかしながら大学は研究所とは異なり、研究に教育、最近は特に社会貢献等までが要求される。その教育の力をfacultyとしたとき、大きなとまどいが生じることとなる。とまどいは、「包み込まれ」「閉じ込められた」ものを自覚することであり、立派な研究業績を持ってcompetenceを喧伝するだけでは当の教員・学生双方にとって不幸である。

そのde-velopのお手伝いをするのが本「教育開発支援センター」である。あくまでも主体はそれぞれの先生方であり、その「能力」を「開発」してさしあげる、などとは毛頭考えていない。学内のさまざまなツール、院生・学部生等の教育補助者としての人的リソース、教育活動を支えていただいている事務スタッフとの交流等、全学の教育的資源を有効に活用して、先生方のfacultyのfull-developmentをサポートすることが使命である。

その意味では今後、本センターの英語訳である、CTL（Center for Teaching and Learning）という名称（シー・ティー・エル）を前面に出し、関西大学の大きな特徴として皆様に語っていただきたいものである、と切に願っている。